

たまごの

第140号

平成30年 3月 1日発行
発行所
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
☎095-824-5494
発行人
山崎 滋 夫
(株)昭和堂

思い出を重ね合わせながら…



長崎県社会教育委員連絡協議会会長

江頭 明文

40年ほど前に勤務した五島の小学校で、6年生の子どもたちに授業をする機会をいただいた。全校の児童数は、私が在職していた頃の8分の1ほどになっていた。6年生は8名。その中には、40年前に担任していた子どもたちの、子や孫も含まれていた。当日は、50歳前後になった数名の「昔の子どもたち」も来校していた。

「ふるさとを想う」というテーマで授業をさせてもらった。子どもたちは、自らの考えを積極的に、そして切れ目なく発表し、授業を支えて

くれた。いたずら心から、時折、「昔の子どもたち」にも発言を求めた。あの頃と変わらぬ教室で、昔と今の子どもたちが、一緒に学び合う、何とも不思議な感覚に包まれたひと時だった。

授業の中で、「ふるさとへの心配」について問うてみた。子どもたちは、「お年寄りが増えて、若い人が減っている。」「町の元気がなくなってしまう。」「小学校がなくなったらどうしよう。」などの答えを返してくれた。少子・高齢・過疎化が進行する中、忍び寄ってくるふるさとの衰退を、子どもたちなりに感じとっているのである。

さらに「今の君たちが、今のふるさとにできることは何ですか。」と

質問してみた。子どもたちは、「あいつをしつかりして、いろんな人と仲よくします。」「地域の行事や活動に積極的に参加します。」「ふるさとの未来が元気であるために高齢者の皆さんとたくさん話をします。」「もつともつとふるさとの素晴らしさを伝えていきたい。」等々、人と人がつながることへの思いや、ふるさとの自慢と心配を見つめ直すことの大切さを、それぞれの言葉で伝えてくれた。

子どもたちも地域の一員である。支えてもらうだけの存在ではない。自らが感じた近未来のふるさとへの不安や懸念を、自らの力で解決したいと願い、行動しようとする存在なのである。まぎれもなく、そして既に、子どもたちは元気なふるさとづくりの担い手なのである。

地域という空間の中で生きてきた時間と、そこで出会ってきた人間たちと、共に重ねてきた種々の営みの総和、それがふるさとだと思う。空間と時間と人間、この「3つの間」を通して、子どもたちは自らを大切に思う心や自分らしく生きる力の土台を築いていくのだと思う。人はいくつになっても、どこにいても、ふるさとを忘れて生きていくことなどできはしないだろう。だからこそ子どもたちだけでなく、そこに生きる人すべての「3つの間」が豊かで

あってほしいと願う。そのために今、我が家での学び（家庭教育）、母校での学び（学校教育）、地域社会での学び（社会教育）の「3つの学び（教育）」をつなげながら、互いに支え合い、高め合うことのできるふるさとづくりを総がかりで進められようとしているのだろう。

授業の終わりに、「ふるさとへのことが好きですか。」と問いかけてみた。子どもたちは、ためらうことなく「はい、好きです。」と異口同音に答えてくれた。嬉しくなった。頼もしいとも思った。「ふるさと大好き」の心こそが、衰退するふるさとの元気づくりに向け向かう力の源だからである。8名の6年生には、ふるさと大好きな心を忘れず、胸を張って、我がふるさとを語り続ける人になってほしい。心からそう願った。わずか45分間の触れ合いではあったが、私にとって、楽しくも学び豊かな時間となった。

数日後、「江頭先生、また学校に来てください。」の言葉に添えて、授業の感想やふるさとへの思い、私への感謝を綴った子どもたちの手紙が届いた。感謝すべきは私の方である。

40年前の懐かしい思い出に、新たな思い出を重ね合わせながら、今と昔の子どもたちの手紙を一気に読み終えた。嬉しかった。

特色ある学校

ドリーム・スクール青潮学園



長崎市立野母崎小・中学校長 高木 久人

本校は、長崎市南部、長崎半島の先端部に位置しており、平成26年度に長崎市初の施設一体型小中一貫校として開校した。三方を海に囲まれ、自然環境に恵まれた立地であり、高浜・野母・脇岬・権島の、4つの独自の歴史や文化をもった地区の中心にある本校が、名実ともに文化の中心として4地区をひとつに結びつける日は、そう遠い将来のことではないと思われる。

一貫校構想がはじめに出たのは旧野母崎町時代に遡る。それが具体的に公表されたのは平成15年のことであり、以来、地域・保護者が開校準備懇話会を組織し、何度も協議を重ねた結果、誕生したのが本校「野母崎小中一貫青潮学園」である。

現在、児童生徒数は212名(小134名・中78名)で、教育理念は

2 心力向上プロジェクト

- ① 主体的な学びを促す取り組み
 - ・ 学びの3か条、家庭学習の手引き等
- ② 基礎学力の定着を図る取り組み
 - ・ 放課後学習教室、朝のスキルタイム等

① ドリームスクールプロジェクト

- ・ 小中合同行事、異学年(縦割り)交流(ドリーム・デイ)、児童会活動と生徒会活動の接続等
- ② 総合学習「のもしぎき学」など、9年間を見通したカリキュラム・マネジメント作成の取り組み

3 体力向上プロジェクト

- ① 体力アップの取り組み
 - ・ 青潮ストレッチ、青潮トレーニング等
- ② 食生活習慣に関する取り組み
 - ・ 交流給食、生活チェックカード等

II 小中一貫教育の合言葉

小中の発達段階を考慮し、「つなぐ」「そろえる」「あえて違える」「そして高める」の4つを合言葉とし、すべての教育活動を支える「見つめる目・感じる心・考える頭」の3つの資質を高めることを意識した教育を行っている。

1 つなぐ取り組み(系統性)

学年間、学期間、ブロック(前期(1~4年)、中期(5~7年)、後期(8~9年))間の円滑な接続を図る取り組み。

① 教師をつなぐ実践

② 子どもをつなぐ実践

③ 地域保護者をつなぐ実践

2 そろえる取り組み(一貫性)

不必要な段差はなくした上で、連続した、あるいは合同で行う取り組み。

- ① 生徒指導でそろえる実践
- ② 教科指導でそろえる実践
- ③ 体力づくりでそろえる実践

3 あえて違える取り組み(独自性) 発達段階や育てるべき力、重視すべき内容を考慮して小中の独自性を保障した取り組み。

① 小、中で違える実践

② 前期、中期、後期の各ブロックで違える実践

4 その他

開校の年から、4年間、「小中一貫教育」研究指定校としての取り組みを継続して行った。平成26~27年度は長崎市教委、平成28~29年度は長崎県教委委託。27年度、29年度には本発表会を開催し、盛会のうちに充実した会とすることができた。今後も市内唯一の小中一貫校として、理想的な小中連携のモデルを追究していきたい。

小中一貫校となったことに合わせて、それまで別組織だった小・中のPTAの組織も一体となった。各学年PTAが発達段階に合わせたユニークな活動を行うとともに、学校保健委員会との連携、学校行事への参加・協力体制が堅固であり、旧野母崎町時代の活動実績の蓄積も認められ、平成29年度は、県内で唯一の優良PTAとして文部科学大臣表彰

を受けた。
おわりに
「青潮学園」としての歩みは始まっ

たばかりであるが、教育理念「ドリーム・スクール」の実現に向けて取り組んで行きたい。

ピースボランテニア活動

長崎市立福田中学校長 風間 伸二郎



私たちの学校では、地域の方々や事業所のご協力をいただき、2002年から現在まで、15年間継続して「ピースボランテニア活動」に取り組んでいます。

この活動の目的は、「空き缶や段ボール・古紙などの資源を回収し、換金することにより、世界の平和に貢献する」というものです。
2001年9月11日、アメリカの世界貿易センタービルに飛行機が衝突しました。その年の福田中2年生の修学旅行の目的地は沖縄でした。しかし、空港内の警備体制が厳重になり、沖縄には米軍基地もあったため、修学旅行に行けなくなっていました。

当時の福田中2年生はこのことにショックを受け、「自分たちが暮ら

している世界は決して平和ではないこと」「世界には戦争などで苦しんでいる人がたくさんいること」を学びました。

そこで、当時の生徒たちは「日本だけではなく、ほかの国々にも平和になってほしい」と考え、生徒会を中心に、自分たちにも何かできることはないかと調べました。すると、地雷で罪もない子どもまでもが命や手足を失っている国や地域があるという悲惨な状況を知りました。このようなことがきっかけで、当時の中学生たちがピースボランテニア活動の基礎をつくり、今に引き継がれています。この活動は、おそらく日本全国どの中学校も実施していない、福田中学校だけの特色ある取り組みです。

活動の実際ですが、毎月2回程度、火曜日の午後に設定されている総合的な学習の時間で活動しています。生徒たちは学年や学級の枠を超えて班をつくり、それぞれの班が校区内の定められた地域に出向き、各家庭

や事業所から不要になった空き缶や段ボール、古紙などの資源を回収します。回収された資源は学校で分別され、翌日、リサイクル業者に引き取っていただき、換金します。そうして得た収益を、東京のNPO法人「難民を助ける会」に送り（昨年度は10万円寄付することができました）、アフガニスタン等に埋められている地雷撤去に役立てていただいています。

ちなみに、1年間に回収した資源の量ですが、段ボール11、600kg、空き缶1、200kg、新聞紙15、410kg、雑誌8、050kgとなり、総計すると36tを超えます。生徒一人あたりおよそ150kgの資源を回収している計算になります。

活動の成果として、地域の方々と中学生が関わりを持つきっかけになっています。ふだんから、道ですれ違ったら挨拶をする、資源を回収するときは「ありがとうございませ」と言うなど、指導を重ねていますが、最近では地域の方から「次の活動はいつですか？」と声をかけていただいたり、慰労の言葉をいただくことも少なくありません。中には「中学生が頑張っているから」と、資源を保管する倉庫を設置してくださっている自治会もあります。

生徒たちも、ピースボランテニア活動に誇りを持っており、楽しみにしています。雨天のために実施でき

ない日はがっかりしている生徒がたくさんいます。そして何より、全校あげてのボランテニア活動を通じて、生徒たちの中に「優しさ」や「思いやり」といった感情が醸成されていると感じています。

また、生徒たちの中に「先輩から後輩へ伝えるノウハウ」や、「この地域はこのお宅を必ず訪問すること」などが世代を超えて伝わっており、生徒が卒業したり、教職員が転職しても活動を継続することができています。しかし、活動草創期の生徒のモチベーションまでも引き継ぐことや教職員の共通理解を維持していくことの困難さがあることも事実です。

今、日本全体が少子化に向かっていきます。長崎県は特にその傾向が顕著です。福田地区も例外ではなく、今後は「活動する範囲を狭くする」「実施する回数を減らす」等の工夫や改善が必要になってくると思われまます。また、段ボールなどの資源の単価も下がってきており、以前ほどの収益を上げるのが難しくなってきました。つつあるのが現状です。

それでも、そうした面だけにとらわれるのではなく、活動を通じて確かに感じられる子どもたちの変容を見逃さずに、生徒も教職員も成長することができればと考えています。

わたしの教育実践

子どもたちと共に



松浦市立上志佐小学校 徳 永 大地

教師としての日々がスタートして、あつという間に2年が経とうとしています。私は、大学卒業後、松浦市の上志佐小学校に配属されました。全校児童が50人程度の小さな学校です。昨年度は4年生、そして今年度は6年生11名の担任として毎日大変ながらも楽しく充実した日々を送っています。

4月に6年生を受け持つことが決まったときは、自分で大丈夫なのだろうかと不安な気持ちもありました。しかし、子どもたちに「小学校6年間で一番楽しく、充実した1年だった」と言ってもらえるように精一杯やってみようと思いました。その第一歩として、今年度は、とにかく子どもたちと共に時間を過ごそうと決めました。

しかし、いざ新学期がスタートすると難しい学習内容や学校行事の準備

など6年生ならではの忙しさや、2年目となり、前年よりも増えた校務に追われ、思うように子どもたちと時間を共にすることができない日々を過ごしました。そんな中、先輩の先生方にたくさんアドバイスを頂き、少しずつその時間を増やすことができるようになりました。共に過ごす時間が増えたことで、それまで気付くことができなかった子どもたちの小さな変化や成長を感じることもできるようになりました。改めて、時間を共にすることの大切さを感じました。

今年度も残りわずかとなり、6年生の卒業が近づいてきました。まだまだ教師としての経験が少ない私が、子どもたちに伝えられることは少ないかもしれませんが、これから共に学び、共に遊ぶことで、子どもたちと一緒に成長していきたいと思えます。そして、子どもたちの笑顔と涙が溢れる卒業式を迎えられるよう頑張っていきたいと思えます。

心つないで



諫早市立有喜小学校 友 永 優子

教職に就いて、ずいぶん月日は経ちますが、相変わらず多忙な毎日です。日々の学級経営の中で、一番大切にしていることは、子ども同士の心をつなぐということです。

いつでも誰とでもかかわる力(対応力)を身につけることは、集団社会で生きていくために必要です。子ども同士の関係がうまくいかないと、学び合う学習も心安まる生活も望めません。

年度当初、クラスの合言葉を決めます。みんなで一つになろうとする意識を高めたからです。そこで、私は、「席がえ」とは言わず、「班づくり」という言葉を使います。一年間ですべての仲間とかかわり、よいところを見つけ合えるよう、毎月話し合いながら班をつくっています。うまく自己表現できない子どもには、個別の時間を設けて、集団の一員として周りとどうかかわるべきか話します。周りの子どもたちにもどう支えていくべきか考えさせます。子どもたちの心がつながり一つに

なると、大きな力を発揮します。そして、真につながるこの尊さを味わうことができます。さらに、できたことではなく、できるようになるために努力した自分を認め、自信をもてるようにしていきます。

往々にして、子どもたちは、「できた」とか「勝った」とか結果だけに目を向けてしまいがちです。失敗すると心が折れてしまいます。自分の頑張りを認められるようになると、自分の持てる力を十分に発揮しようと努力します。友達の頑張る姿を応援できるようなります。自己肯定感が子どもの心を満たし自分を好きになると、友達を広い心で受け入れる余裕が生まれます。

私は、一人一人の心をつなぐことが、学力向上、安心できる仲間づくり、落ち着いた学校生活につながると思います。決してたやすいことではありませんが、今後もよりよい方法を模索し、くらしや学びの中で、心をつないでいくことの大切さを子どもたちに味わわせていきたいと思えます。

「心つないで」…、これはいつしか、私の座右の銘ともなっています。

毎日光る言葉を贈る



島原市立有明中学校 加藤 さくら

「誉める言葉は、光る言葉のプレゼント」教育実習の時に尊敬する先生からいただいた言葉です。忙しく過ぎていく学校生活において、この言葉は私のお守りとなっています。

授業では、きらりと光る生徒の頑張りを誉めるようにしています。大きな声で発表をする勇氣。困っている友人を助ける優しさ。苦手を克服しようと積み重ねる努力。一つ一つを見逃さず子どもたちを認め、励ますようにしています。

教師が子どもの「よいところ」に目を向けるだけでなく、子どもたち同士がお互いを認め合う雰囲気をつくることを心がけています。日々の短学活で、子どもたちが友だちの頑張りを紹介する時間を作っています。どんな小さなことにも言葉にして伝えようとする思いやる気持ちが育まれています。

保護者の支えなしには、私の学級経営は成立しません。嬉しいことが

あるたびに、保護者へ電話をかけるようにしています。時には涙ぐんで一緒に喜んでくださいます。思春期のために、家庭で会話が少なくなりがちな子どもたちが、家でも頑張りを受けてもらえるように、教室と家庭をつなぎます。

子どもたちは私を写す鏡です。きっと私がするように、子どもたちはするのだと思います。やわらかな心を育むために、毎日光る言葉を贈っています。これが未熟なわたしの精一杯の教育実践です。

教師こそ最大の教育環境



長崎市立茂木中学校 小川 寛之

海と山に囲まれ自然豊かな長崎市立茂木中学校に赴任して2年目を迎える、私は、全校生徒98名の純朴で元気な生徒に囲まれながら毎日を楽しんで過ごしている。

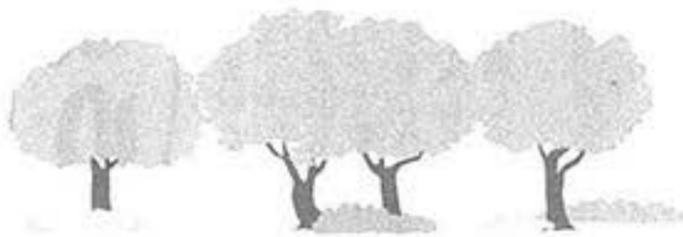
学級経営では、生徒が落ち着いて学べるように、より良い教室環境づくりを心掛けてきた。その一例として、「学級に生花を飾ること」がある。週末にスーパーで切り花を購入し、月曜日に持っていく。季節の花が飾られた花瓶は教室に活力を与え、華やかで落ち着いた雰囲気をつくってくれている。また、係活動の一つに「花を美しく飾る」係を位置づけた。花を大切に世話する姿は、生命を慈しむ態度そのものであり、私だけでなく級友にも良い影響を与えている。

保健体育科の指導では、日頃から生徒の賞賛の機会をつくりたいと考え、学校用iPadを授業時に携帯することにしている。生徒が仲間の

良いパフォーマンスをみて、全体で共有し合うことが、互いの学びを向上させるとともに、個々のつまづきを視覚的にフィードバックすることが出来る課題解決のための効果的なツールだと思っているからである。

学校外では、自身の健康・体力の向上に努め、毎年、長崎ベイサイドマラソンに参加している。「小川先生も頑張っているよ」という姿勢を発信したいという思いからでもある。

「教師こそ最大の教育環境」だと言われるように、私はこの10数年、生徒と共に歩み、互いに成長することを大切にしてきた。それは、私自身が謙虚な姿勢で学び向上していくことが、生徒たちの未来に影響すると思っっているからである。私は今後ますます研鑽を重ね、生徒が「茂木中学校で学べてよかった」、「あの先生に出会えてよかった」と思ってもらえるように、常に一人ひとりの個性と向き合いながら、どのような支援ができるのか、また、どんな指導方法が適切なのかを常に模索し、生徒たちの夢の実現の一助となれるよう、様々な実践を試みていきたいと思う。



おたっぴやたぶり

健全な精神は 健全な肉体に宿る

横浜市緑区中山町 松浦 隆譽
(昭和29年3月卒)



「健全な精神は健全な肉体に宿る」という諺にもありますように、健康で生き生きとした生活を過ごす時は、精神的にも未来志向で生きる力が漲っています。

ところが、健康を損い身体的な障害を持つ人は、どうしても自己防衛的で消極的な行動をするものです。私は前回投稿した9年前は77歳で元気そのもので、「人生80年代到来」というテーマで健康志向の日常生活を過ごすにはどうあるべきかという事を基本に置いて執筆しましたが、今回は、只細々と生活している昨今の現状をご報告することで、会員の皆様には何のお役にも立たないことを深くお詫び申し上げます。

実は2年前の84歳の時に、急に左

膝が曲がらなくなり歩けなくなり、昭和大学藤が丘病院で手術し、治療とリハビリで4か月入院しました。退院後は以前とは打って変わり杖を頼りに左足を引きずるように、トボトボと歩くように一変してしまいました。勿論活力も減退してしまいました。

長崎大学東京玉園同窓会の会長に5年前就任しましたが、この役はそのままで、横浜市小学校退職校長会の緑区幹事は平成11年から19年間任務について来ましたが、今年度で退任することで後任を決めました。

老人は転倒して骨折し入院するところが一番老化を進める原因になりますので、転倒しないように注意し、道路の横断でも何台かの車を見過ごし横断するという細心の注意をはらっています。

家から出ることを好まず、又、友達との交流を面倒がる老人も居ますが、このような人は痴呆症にかかりやすくなります。出来るだけ他人との交流を深め、会話を楽しむことは大切です。折角生れて来た人生を残る時間でも有意義に過ごしたいものです。

取り止めない拙ない投稿になったことを深くお詫び申し上げます。

挑戦

福岡市西区 田崎 賢吾
(昭和50年3月卒)



私がランニングを始めたのは1年半前で、退職して3年がたち非常勤の仕事もゆとりができた頃でした。「さあ、ゴルフをして旅に出て老後を楽しむぞ」と思ったのも束の間、持病が悪化していました。「このままでは、身体のおちこちが悪くなり、最悪、失明。手足の切断を余儀なくされますよ。」と主治医が言います。治療に専念しますが数値がなかなかよくありません。通院の度に暗い気持ちで診察室を後にしていました。こういう日々に出会ったのが「福岡マラソン」のパンフレットでした。一読して、「5km位なら走れるだろう」と福岡マラソンFANRUNに応募していました。まずはランニンググッズを整え、家の前の直線道を走ってみました。走れません。たった300mなのです。途中で足が止まります。体力の衰えに愕然となりました。でもやめるわけにはいきません。100m走っては1000m歩き、2000m走っては2000m歩きと少しずつ距離を上げていくうちに少しずつ距

離が伸びてきました。自信とともに体型の変化に惚れ込むようになりました。マラソン当日は、ひんやりとした空気に青く澄み渡る秋空の日でした。私は最後尾で、遠くでスタートの号砲を聞き、渡辺通を22分遅れでスタートしました。沿道は、街の人の応援がゴールまで連なり気分も最高でした。次は「伊万里ハーフマラソン10km」を走っていました。スタートして周りが早いものなのっていつもの倍のスピードです。ついて行けません。街の中を一周するあたりでは、へばってしまい、後1kmというところでタイムオーバーとなりました。それでも歩道を走って59分59秒でゴールしました。そうこうするうちに、持病の数値が改善してきました。「薬が合ってきたようですね。」という主治医の言葉を聞きながら、「私も頑張っているんですよ。」と心で叫びました。次は2か月後には「海の中道はるかぜハーフマラソン」のスタートラインに立っていました。さすがに21kmは大変でした。歯を食いしばり歩幅を小さくして、ふらふらになりながらゴールしました。初めてもらった完走証には、2時間17分28秒、1806人中1093位と書いてありました。ランニングを続けて、競技会に参加する中で、走ることの楽しさ、一歩一歩の積み重ねがゴールに到達するという必然を感じるようになりまし。これからも諦めずに一歩一歩前に足を踏み出し、マラソンに、人生に挑戦していきたいと思っています。次は、「いぶすき菜の花マラソン」フルに挑戦します。

母校だより

日弁公 題

「紅旗征戎吾が事に非ず」 やー来し方と行く末

長崎大学教育学部長 松元 浩一



教育学部同窓の皆様、いかがお過ごしでございましたでしょうか。今年度は秋が短く、早い寒波の訪れでした。穏やかな春が待ち遠しいところです。わたくしは、昨年十月一日より教育学部長事務取扱、大学院教育学研究科長事務取扱、十一月一日より教育学部長、大学院教育学研究科長の任にあたることとなりました。今年度を振り返り、現在の教育学部について、その一端を述べてみたいと思います。本学部は、平成十年度に、学校教員養成課程（学生定員180名）と情報文化教育課程（学生定員60名）の二課程（学生定員計240名）の

教育課程を開設しましたが、十年後の平成二十年度からは、学校教育教員養成課程の一課程のみに改組し、学生定員は変更なく240名（小学校教育コース125名、中学校教育コース70名、幼稚園教育コース30名、特別支援教育コース15名）として今日に至っております。教員組織は、平成十年度と二十年度のちょうど中間にあたる平成十五年度に、それまでの十一講座体制から、現行と同じ六講座体制に変更しました。

しかし、来たる平成三十年度より、第三期中期目標期間の終わる平成三十三年度までに、これら教育課程と教員組織の体制を大きく改編することになりそうです。こうした改編を強く促すもののひとつは、いわゆる「有識者会議」（「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」）の報告書です。本年度八月にまとめられたこの報告書には、大きな転換を迫る課題が広範囲にわたって多く列記されています。課題を一挙に解決することは難しいですが、今日という時代は、スピード感を顕わにし、焦眉の急として対応することを強く求めてきま

す。「Festina lente」が矛盾するようですが、ゆっくりと先へ先へと急ぐ必要がありそうです。

有識者会議の報告書は、冒頭、「ミッションの再定義」を踏まえつ

つ、附属学校園も含めて、教員養成学部としての強みや特色、地域や社会から求められている役割を明確化

し、学生定員の見直しを含む改革を進めるよう求めています。今後、教

員の採用が多くは見込めなくなるなかで、限られた（人的）資源を最大

限生かすために、数値等のエビデンスに基づいて、質の高い教員の養成

に努めるよう求めています。このよう

な厳しい教員育成の環境のなか、本学部は、「ミッションの再定義」

に従って「実践型教員養成機能への質的転換を図る」ために、学校現場

で指導経験のある大学教員を第三期中期目標期間末には（在籍教員の）

30%を確保し、その体制下で、長崎県における小学校教員採用の占有率

55%、教職大学院生の教員就職率90%を確保する取組を行っております。

その取組を一層進めるために、将来構想、入試の在り方、附属学校園の在り方、に関する三つのWGを設け

ました。

藤原定家は「紅旗征戎吾が事に非ず」という心境を以て世上の混乱か

ら距離をおいて作歌に専心し、今日に数多くの秀歌を残しました。一方、

そうした立場を深く反省し、自己の

立場を確認した歴史家も多く存在します。先に述べました教育学部の置かれた厳しい状況に臨んで、教育学部に籍をおく研究者としては、やはり全員が、こうした課題について、一度深く考えてみる必要があると思います。

人事のご報告をいたします。今年度をもって三名の先生方が定年退職をお迎えになります。赤崎眞弓教授（家庭科教育）、飯塚知敬教授（哲学・倫理学）、原田純治教授（社会学・倫理学）です。永年にわたる本学部・研究科へのご尽力に深く感謝するとともに、これからのご健勝をお祈り申し上げます。なお、はじめのお二方は、引き続き本学部・研究科に特任教授としてご留任、教鞭をとって下さいます。

最後に悲しいご報告をいたします。昨年十一月六日に福田正弘教授（社会科教育）が、十二月五日に佐藤敬助名誉教授（彫刻）が逝去されました。両教授ともに、永きにわたり教育学部発展のためにご尽力くださりました。ここに心から感謝申し上げます。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。長崎大学教育学部、大学院教育学研究科、附属学校園は一体となって、不易流行のもと、引き続き、長崎県の教育に貢献いたす所存です。教育学部同窓お一人おひとりの御健康と御多幸を深く念じつつ、一先ず筆を擱きます。

将来の夢

明日に続く夢

佐世保市立日宇中学校3年

濱野 晴輝

私の将来の夢は薬剤師になることです。そのきっかけとなったのは「祖母」でした。

私の祖母は「アルツハイマー病」という病気にかかり、うまく会話ができません。殆ど目を瞑っている状態です。そのため私たち家族の顔もよく見えません。しかし、昔からこうだったわけではありません。私がまだ、幼かった頃はとても元気で、良く抱っこをしてもらっていました。孫をとっても可愛がってくれる優しい祖母でしたが、元気だった頃を知っているのは私を含め4人いる兄弟の内、私と1つ下の弟だけです。2人の従妹達も知りません。

毎年祖母の誕生日には、私と従妹たちの家族全員で会いに行き、お祝

いをするのが恒例となっています。

その時の祖母の様子は、目は瞑っているものの、私たちの賑やかな声や雰囲気を感じているのか、とても嬉しそうで、若干微笑んでいる様子も見えます。そんな祖母を見て、

「いつか皆の笑顔を見せてあげたい。」

と思うようになりました。更に、別の日には叔母からこう言われました。「薬剤師になったら、お婆ちゃんのような病気の人が治せる薬を作ってあげてね。」

祖母の微笑みで薬剤師を志し、叔母の言葉で、それが強い確信へと変わりました。

医療の現場は日進月歩で、新しい薬の開発や技術の進歩により、今まで助からなかった病気の人にも助けられるようになってきています。

努力次第で人は何にでもなれます。私は祖母や同じように病に苦しむ人々を救うために、薬剤師になるこ

とを目指して、今日も勉強に励みます。

わたしの夢

対馬市立豊玉中学校3年

末松 芽依

私の将来の夢は医者になることです。この夢は幼少期から胸に抱いていました。

きっかけは、大好きだった祖父との約束でした。祖父は、保育所に毎日迎えに来てくれたり、勉強を教えてくれたりと、私をとってもかわいがってくれました。そんな祖父が肺癌で入院したので、私は自分に何かできることはないか考え、医者になることを決めました。

「大きくなって、私が治すからね。」と祖父に話すと、嬉しそうな顔をしながら、心から応援してくれました。私の願いは届きませんでした。その時の決意は揺らぐことはありません。

祖父を救いたい一心で決めたことでしたが、今なら現実的に、医者と

いう仕事かどれだけ大変で責任の重い仕事か分かります。医者は人の生死に関わる仕事です。全ての人に死は訪れるものなので、時には死を見守る立場にもならなくてははいけません。それでも、患者と共に病と闘い、心の支えになるといふところがやりがいがあると思います。

現在、日本では高齢化が急速に進み、医者の需要が高まっています。私の住む対馬では、働く若者も年々減少しています。そうすると、医者不足により、迅速な対応ができなくなるのが考えられます。そうした事態を防ぐためにも、私はふるさと対馬で医者になって、地域の人の心の拠り所となれる様な存在になりたいです。

中学3年生の今、夢を掴むための一歩を踏み出さなければなりません。辛い道のりになるかもしれませんが、それを乗り越えた分、たくさん人の笑顔に出会えます。高い目標ではありますが、祖父との約束を実現するため、精一杯努力していきます。

動つてつます同窓会

地区懇話会

西彼地区懇話会の概要

事務局長 濱崎嘉一郎

本会の主事業の一つである地区懇話会は、県下17地区において年1回開催しています。本年は下記のとおり開催しました。

場所 ロイヤルチエスターホテル
参加者 学部長 現職会員31名 退職会員9名 事務局4名 計45名

懇話会 時津中学校中里祥之校長から初めの言葉がありその後、松元浩一教育学部長から挨拶がありました。教育学部が一丸となって取り組んでいる現状を知ることができました。

講話 演題「これからを生きる子どもを前に、いま考えていること」
「生き方」の土台となる学びを講義 玉園同窓会会長 山崎 滋夫
内容 「生き方」を導く学校の課題、①子どもたちに見る心の荒れ ②体感・習得させたい行動原理として、山崎会長の教育行政及び教育実践からにじみ出た教育観・課題に基づいたきめ細かいそして格調高いお話でした。



懇親会 学生時代に戻り、青春時代を懐かしみながら地域の教育を盛り上げようと語り合うことができました。

我が学舎は心のふるさと

時津町立時津東小学校教頭

花田 直樹



「おおく長崎大学へ我が母校へ」
時津中学校、川里祥之校長先生の大学学歌斉唱を幕開けに、玉園同窓会西彼地区懇話会・懇親会が厳かに始まりました。

まず、教育懇話会において、玉園同窓会会長、山崎滋夫先生から、「こ

れからを生きる子どもを前に、今、教育で考えておきたいこと」と題して、御指導をいただきました。

「教育の課題は、時代とともに変わっていく。事態の変化に通じる『基本的な学び』を大切に、教育の不易への再認識も必要である。」と熱く語られました。また、自己・他者・自然・暮らしについての学びを通して、「将来を見据えた学ぶ姿勢」を育てることこそが学校教育の使命であると教えていただきました。山崎先生から薫陶を受ける機会をいただいた喜びを心に刻み、これからも教師として、人として、精進していきます。

また、懇親会においても、諸先輩方とお酒を酌み交わしながら、素晴らしいお話を聞かせていただきました。懐かしい先輩方あり、初めてお目にかかる方々あり、とても有意義な時間を過ごすことができました。そして、何より、私たちが多くの方々を支えてくださっていることに感謝しました。

この玉園同窓会での「出合い」と「絆」が「明日からまた子どもたちといっしょにがんばろう。」と活力を与えてくれました。そして、「我が学舎は、いつまでも心のふるさと」だと実感できた一日となりました。ありがとうございます。

就職支援事業

セミナー受講感想

長崎大学教育学部4年 伊藤 彩

この度平成30年度長崎県小学校教員採用試験に合格することができました。小学校6年生のとき、何事にも情熱的で子ども思いの優しい担任の先生に憧れを抱き、小学校の教師を志しました。今、夢だった教師という仕事のスタートラインに立てたことをとても嬉しく思っています。

教員採用試験の対策を行う際、玉園同窓会の方々には大変お世話になりました。お忙しい中、毎日対策のご指導をしていただき、自信をもって試験に臨むことができました。採用試験のアドバイスだけでなく、教師としての心構えについてのお話を聞くこともできました。また、学級経営や教材研究などの実践的な内容についても学ぶことができました。

私の目指す教師は、子どもと同じ目標に向かって進んでいくような「子どもとともに挑戦する教師」です。先生方から教えていただいたことを糧に、これからもっと力をつけ、目の前の子どもたちと日々成長していけるように頑張ります。本当にありがとうございます。

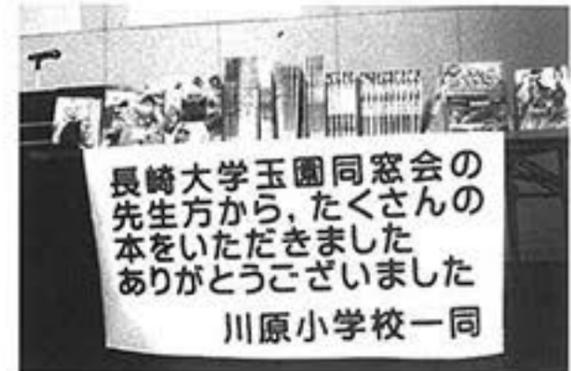
公益目的事業の募集

長崎大学同窓会は、一般社団法人として長崎県内をはじめとする教育振興に寄与することを目的としての活動を行っています。

この目的を達成するための事業として、「長崎県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校」に対する図書購入の助成、及び「長崎県内の児童・青少年育成を目的とする事業」への助成を行っています。30年度も下記の要領で募集を行いますので、周知のうえで応募ください。

図書購入費助成事業

- 1 助成校 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校（7校程度）
- 2 助成額 1校につき10万円未満
- 3 募集期間 平成30年4月1日～6月30日
- 4 応募手続き
 - ① 応募希望の学校は、電話（095-824-5494）で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
 - ② 応募した学校へ「募集要項」を送付する。
 - ③ 学校は、「申込書」に、「購入図書計画書」を添えて提出する。
 - ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した学校に通知する。
 - ⑤ 助成を受けた学校は、図書購入終了後、図書贈呈式を行う。



児童・青少年健全育成事業

- 1 助成の対象となる事業
 - ① 児童及び青少年が参加して行う体験活動・発表会・展示会・伝統文化の継承・社会貢献などの実践活動
 - ② 健全育成を目的として実施する、保護者・地域の指導者等の研修、学習活動
- 2 助成額 1件当たり5万円を上限として、総額20万円の範囲内で、対象とする事業の必要経費の概ね2分の1を限度とする。
- 3 募集期間 平成30年4月1日～6月30日
- 4 応募手続き
 - ① 応募希望の団体は、電話（095-824-5494）で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
 - ② 応募した団体へ「募集要項」を送付する。
 - ③ 希望する団体は、「申込書」に「実施計画書」を添えて提出する。
 - ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した団体に通知する。
 - ⑤ 助成を受けた団体は、事業実施後、「実施報告書」を提出する。

一事一務一局より

「終身会員」への入会願い

今年3月、御勇退される同窓会員の皆様、永きにわたる長崎県教育界への御尽力、本当に御苦労様でした。本同窓会では、退職後も終身会員として、本会の進展に寄与していただけたらと願っています。

是非、入会のほどよろしくお願ひいたします。

(1) 入会金 5,000円（終身にわたって、会報を送付します）

(2) 振込用紙は、事務局へ連絡してください。すぐお届けいたします。

ホームページを開設しました

本同窓会は、一般社団法人として、その活動状況や公益目的事業について、会員の理解をはかることはもとより、それ以外のより多くの人々に知っていただくことが必要になってまいりました。そこでホームページを開設いたしました。

今後の本同窓会の運営にあたって、大いに活かし新たな同窓会活動をめざしてまいりたいと思いますので皆様のご活用をお願いいたします。

ホームページアドレス

<https://www.edu.nagasaki-u.ac.jp/ja/tamazono/>
メールアドレス nu-tamazono@mxm.cncm.ne.jp